

## 実感を伴った理解を深めるために

家政教育・藤田昌子

### 1. 授業の概要

(1) 対象授業の科目区分：教職科目 A

科目名：初等家庭科教育法

登録学生数：151 名中 79 名担当

(2) シラバスに掲げられた授業の目的、到達目標、関連するディプロマ・ポリシー(DP)

【目的】本授業は、児童を取り巻く生活環境の諸課題・児童の実態と家庭科教育の関係性を踏まえ、現代の小学校家庭科教育の意義や課題、教育内容、支援方法等を理解し、小学校家庭科における授業実践に必要な基礎的な知識と教育実践力を身につけることを目的としている。

【授業の到達目標】

- 1) 家庭科教育の理念・意義を説明できる。
- 2) 家庭科教育の動向と課題を説明できる。
- 3) 小学校家庭科教育の目標と内容を説明できる。
- 4) 小学校家庭科の学習の視点と方法を説明できる。
- 5) 小学校家庭科の教材研究ができる。
- 6) 小学校家庭科の学習支援案が作成できる。

【ディプロマ・ポリシー】

**DP1** 教科・教職に関する確かな知識と、得意とする分野の専門的知識を修得している。

(知識・理解)

**DP3** 子どもの発達に応じた授業・保育の構成や教材・教具の工夫ができ、個に応じた指導や説明ができる。(技能・表現)

(3) 授業の方法、形態、内容の概要

前半は、初等教育における家庭科の学習支援に関する実践力の基礎を養うために、児童および家庭科教育の実態、児童を取り巻く生活環境の諸課題等を踏まえ、家庭科教育の目標、内容、支援方法、教材研究、授業設計等について解説・検討を行う(講義、ロールプレイング、シュミレーションゲーム、実習)。後半のマイクロティーチングでは、各班が学習指導案を作成し、模擬授業を行った後、振り返りとして授業研究を行う(演習、実習)

(4) 今年度、特に意識して取り組んだこと

約 80 名ものの受講生がおり、また教育法という前半は講義形式中心の授業のなかで、家

庭科で必要になる「実感を伴って理解する学習(小学校学習指導要領解説 家庭編 P9)」を展開できるようにした。その方法として、今年度取り入れたのは以下の 2 点である。

ゆで野菜サラダづくり

生活経験の少ない学生たちは、小学校家庭科習った「水からゆでる野菜」「お湯からゆでる野菜」の区別さえもつかない者も多い。そうした学生たちに「ゆでた野菜を必ず 1 つ以上は使うこと」「ドレッシングを作ること」を条件にゆで野菜サラダを自宅で調理するという課題を出した。その際、調理はあくまでも手段であるので、ゆで野菜サラダを作ることを通して、この単元で何を教えたらよいのか、そのためにはどのような指導方法や教材の工夫ができるか、安全面での配慮はどうしたらよいかなどを考察させ、レポートとして電子データで提出させた。そして、授業時に、作品をスライドショーで流し、考察を元に指導内容、方法などについて検討させた。

実物を使って

五大栄養素は小学生だけでなく、大学生も理解度が低い。そこで、「ごま」を例にあげ、「脂質」が多く含まれることを実感を伴って理解するにはどうしたらよいかを学生に考えさせた。意見を出し合った後、1 人ひとりに「ごま」と「天ぷら敷紙」を配布し、各自で「ごま」に含まれる主な栄養素が「脂質」であることを体験・実感させた。

### 2. アンケート結果

(1) 学部 DP との対応(回答者 56 名)

**DP1** 教科・教職に関する確かな知識と、得意とする分野の専門的知識を修得している。

対応していなかった	16.1%
どちらかといえば対応していなかった	12.5%
どちらかといえば対応していた	19.6%
対応していた	51.8%

「対応していた」とする学生が過半数を超え、「どちらかといえば対応していた」と合わせて 7 割を占めていた。一方で「対応してい

なかった」「どちらかといえば対応していなかった」とする学生が3割みられ、知識が定着するような工夫が求められる。また、初回のガイダンスで、本授業の目的や到達目標などを説明したのにもかかわらず、授業評価アンケートの「もっと学びたかったこと」という自由記述欄に教科内容にかかわるコメントが複数見られることから、2年前期開講の「初等家庭」との連携が求められる。

**DP3** 子どもの発達に応じた授業・保育の構成や教材・教具の工夫ができ、個に応じた指導や説明ができる。

対応していなかった	1.8%
どちらかといえば対応していなかった	7.1%
どちらかといえば対応していた	33.9%
対応していた	57.1%

「対応していた」「どちらかといえば対応していた」とする学生が合わせて9割を占め、概ね達成したと考える。

(2) 授業評価アンケートの自由記述より

紙面の関係上、今年度、特に意識して取り組んだ内容に関して、学生の記述から授業評価をみることにする。

野菜サラダづくり

・実際にサラダを作って子どもたちに何を教えるのか考えられたことは貴重な経験になった。この経験によって、子どもたちは何を疑問とするのか、どこでつまづくのか考えることができ、自分の中の知識と指導観が身についた。

・実習をしながら、普段家で自炊をするときは何も考えずにレシピだけを見て調理するが、ゆでた野菜を鍋からお湯きりのためのザルへうつすとき、「この過程は子どもたちがやけどをしないように注意させよう」と考えながら行った。少し意識を変えるだけで、普段していることをどう教育にいかせるかなど、ものごとを違う視点からみられるようになることを学んだ。

実物を使って

・ごまを指ですりつぶすと、本当に指が油っぽくなり、主な栄養素が脂質であることがわかりました。実践的な活動があると、実感を伴った理解につながりやすいなと感じました。  
・ごまを実際につぶして油を確かめたのは印象に残っている。やはり実践的な学びはインパクトが強い。

・一般的な知識として、ごまは香りがよいことや脂質が多く含まれることなどは知られているかもしれないけど、それを体験的に、また視覚的に教えられるということを知りました。やはり子どもたちにとっても、ただ教科書の内容を教わるだけよりも、それを実感した方が深く、また印象にも残りやすい学びになると思います。

3. 総括

(1) 次年度への改善点

授業評価アンケートの「もっと学びたかったこと」として、「特になし」という内容が大半であったが、記述があった中では「マイクロティーチング」に関する内容が最も多かった。「人数も多いので、仕方ないと思うのですが、自分も模擬授業をしてみたかったし、45分まるまるの授業もみてみたかったです」「もっと時間があれば、いろいろな人の模擬授業のコメントを共有したかったし、授業者の考えを聞く場が欲しかった」「マイクロティーチングをビデオ撮影しておいて、希望した班には自分たちの発表を振り返る時間が欲しいと思いました(授業時間外でかまわないので)」「授業内容についての先生のコメントがもう少し欲しかった」とあり、ビデオ撮影は次年度から即実践し、時間的制約が大きいですが、少しでも多くの学生が授業者となれるよう、また教員や学生からのコメントの時間を少しでも長くとって振り返りを充実させるよう、検討していきたい。

(2) 目的、達成目標、関連 DP を踏まえて

「家庭科という教科は他の教科よりも日常生活に密接に関連しているということがわかったし、以前よりも家庭科を学ぶ大切さを意識するようになりました」「周りのことに対して、家庭科のネタになることはないかと考えるようになった」「今までは漠然と授業を受けることが多かったが、自分が教える立場ならどうしているのか、また受ける側としては何があればより効果的に学習できるのかということを考えながら授業を受けるようになりました」というように、家庭科の意義、学習の視点、内容や方法、教材研究などに関することが、授業評価アンケートの「本授業を受講し、自分自身のなかで変わったこと」としてあげられており、関連 DP の評価も含めて、本授業の内容・方法は概ね適当であったと考える。